

元來西方金山附近にして、西突厥の部下なりしが、此れが東方に移りて東突厥の部下となり、鬱督軍山地方に現はれしは、西突厥射匱可汗の壓迫の爲に外ならざること、新唐書等に記する所なるのみならず、默賧の時代にも其の種族の一部は相連りて突厥の西方に存在せしこと明らかなれば、此く右地と回鶻とを結び付けしはもとより理あり、左衽の俗は必ずしも十二部に限れるに非れば、たゞ右地に對せしめたるものなるべし。要するに奇姿英徳の大汗默賧の時代に突厥の勢力廣く北方種族の間に互りしことを云へるものにして、新唐書突厥傳にも此の形勢を記して、「大抵兵與頡利時略等、地縱廣萬里、諸蕃悉往聽命」といへり。

○頃屬家國喪亂、蕃落分崩、委命南奔、歸誠北闕。

家國喪亂とは默賧の晩年に於る國難を云へるものにして、此の事は既に陸氏の論ぜるが如く、開元四年默賧が一度び拔野古部を敗りて後、備へざるに乗じて其の襲ふ所となり、終に命を殞せしを云へるものなりとす、かくて默賧の亡ぶるや、則ち彼の闕特勤出で、部族を糾合し、兄默棘連 (mägrän) を立て、可汗とするに至りしが、此際恐るべき虐殺の光景の演ぜられたるものゝ如し、抑も默賧の即位の事情は、兄骨咄祿可汗の没後、其子即ち默棘連及び闕特勤等の幼なりしより、自から立ちて位に上りしものにして、寧ろ正當の順位に非ず、然も其後默賧の子は父の爲に立てられて小可汗となり、位最も高く、父の没後は勿論之に代るべき有様なりき、されば今此の變事に際して、闕特勤が部族を統ぶるに至るや、篡奪者なる默賧の系統に對して、迫害を加ふべきは必然の勢なりしなり、則ち唐書の記載によれば、先づ攻めて小可汗を殺し、其の他悉く用事の臣下を殺戮し終るに至れり、此に於てか其